立ちてかひある

Vol.4

巻頭グラビア〈2021 Memories of Jumonji Gakuen〉
コロナ禍でも輝く学生・生徒 2

〈特集〉
伝統100周年からの新たな挑戦 4
変わる！十文字学園
《巣鴨発》大きく変容する社会で目指す
十文字高等学校の探究型教育
横尾康治 十文字中学高等学校校長 6
《巣鴨発》リモートの長所を活かして
対面授業も生中継
浅見武 十文字中学教頭 8
《新座発》女子教育「一世紀の伝統」から
新しい十文字学園文化の創出を！
志村二三夫 十文字学園女子大学学長 10
《新座発》コロナ禍の経験でつかんだ
十文字学園女子大学の未来像
安達一寿 十文字学園女子大学副学長（教育担当） 12

学園創立100周年記念 オンライン講座
「そして、映画は作られた！
映画の内幕お話しします。」
映画監督 前田哲さん 14

地域と共に
フードパントリーが広げる地域の絆
星野敦子 十文字学園女子大学教授
（地域連携推進センター長） 16

十文字こと物語 第3回
熱き女子教育への想い
ふるさと深谷の巨人・近代日本経済の父
「渋沢栄一」の偉業に学ぶ！
新井慎一先生（深谷市郷土文化会会長） 22

WEリーグ発足 活躍する十文字OG選手
佐々木則夫 十文字学園女子大学副学長・JFA女子委員長 24

園庭のうた 2021・夏の行事・イベント
竹迫久美子 十文字女子大附属幼稚園主事 26

JUMONJI TOPICS 27

表紙題字：原千里（十文字学園女子大学OG） イラスト：amanaimages

2021度
Memories of Jumonji Gakuen

コロナ禍でも輝く学生・生徒

コロナ禍で迎えた2021年度、十文字学園で学ぶ私たちにとっても、戸惑ったり、困ったりすることが少なくない１年でした。でもそんな状況の中で一生懸命に頑張ってきました。それもいろいろな方々に支えていただいたおかげです。これからも感謝の気持ちを忘れず、未来に向かって歩き続けたいと思っています。

東京都高等学校吹奏楽コンクールで東日本組金賞

〈巣鴨発〉吹奏楽部

吹奏楽部は、2021年９月12日に開催された「第61回東京都吹奏楽コンクール」（府中の森芸術劇場）で東日本組金賞を受賞しました。吹奏楽コンクールは個人戦でなく団体戦です。力を合わせて取り組むことの大切さを学べたと思いますし、なによりコロナ禍で活動を支えてくれたみなさんに感謝したいと思います。

全国高等学校ギター・マンドリン音楽コンクールで優秀賞

〈巣鴨発〉マンドリン部

マンドリン部は、2021年７月29日、30日に開催された「全国高等学校ギター・マンドリン音楽コンクール」（大阪府泉佐野市のエブノ泉の森ホール）に出場して優秀賞を受賞。さらに３年連続して優秀賞を受賞したことから大阪府知事賞もいただきました。部を支えてくれたコーチや顧問の先生、そして応援してくれた学友たちに心から感謝しています。

関東大学女子サッカーリーグの１部２部入れ替え戦で勝利

〈新座発〉サッカー部

最前列右端が横山さん

大学サッカー部は、2021年11月の関東大学女子サッカーリーグ戦（２部）で優勝、12月5日に行われた１部２部入れ替え戦では慶應義塾大学に「1－０」で勝利して１部昇格を果たしました。

また私自身は、コロナ禍にもかかわらず、実習で「特別養護老人ホーム ハピネス昭和の森」に受け入れていただき多くを学びました。ありがとうございます。（食物栄養学科３年 横山野ノ香（ののか）さん）

実習中の横山さん

フードパントリーで地域の方々と連携

児童教育学科と人間福祉学科の混成チーム「子育て応援JUMONJIチーム」は、2021年７、８、10月に、新座市栄四丁目商店会のフリースペース「たまりば」で「子育て支援フードパントリー」（子育て家庭向け食料品等無料配付会）を実施しました。地域の企業や商店街などの皆さんから、たくさんの寄付や協力をいただきました。また、会場に足を運ばれた方々から多くの感謝の言葉をいただき、私たち自身も元気になれました。（関連記事14ページ）

JFA第12回全日本U-15女子フットサル選手権大会優勝

中学サッカー部は、2022年１月10日に三重県営サンアリーナで開催されたJFA第12回全日本U-15フットサル選手権大会に出場。決勝戦でAICシーガル広島レディースに「5-3」で勝利して、２大会ぶり４度目の全国優勝を果たしました。応援ありがとうございました。

2021年度 関東高校女子サッカー大会優勝

高校サッカー部は、2021年６月７日、山梨県で開催された「2021年度関東高校女子サッカー大会」の決勝で、前橋育英(群馬)を「１-０」で下して、２年ぶりに優勝。「離れているけれど、全員で戦っている！」を合言葉に、部員85名が新型コロナウイルスに屈することなく団結したからこその勝利でした。

私たちの実習や活動を受け入れてくださ った方々に、こころより感謝いたします

特集

伝統100周年からの新たな挑戦

変わる！十文字学園 巣鴨発

大きく変容する社会で目指す十文字高等学校の探究型教育

「Move onプロジェクト」に参加する生徒たち

十文字高等学校は、2022年度から「自己発信コース」「特選コース」「リベラルアーツコース」の3つを柱とした新たなカリキュラムをスタートさせる。「自立した、社会で活躍できる女性」を育成し、送り出すための思い切った改革だ。横尾康治校長にその目指すところをお聞きした。そして浅見武教頭にICTを活用した十文字中・高の取り組みをうかがった。

横尾康治 十文字中学高等学校校長

5年先10年先を見据えた新コース設立

私はもともと、日本の教育が未来型になっていくのに即して、十文字学園も変わっていく必要があると強く感じていました。5年先10年先に、世の中でどんどん新しい変化が生じていくのは間違いありません。その中で、学校だけが変わらないというわけにはいきません。そういう意味で、十文字も今だからこそ変わっていく必要があるのです。

――新しくつくられた3つのコースとはいったいどんなものなのでしょうか。

「自己発信コース」では、「探究型の授業」が行われます。そのために、自分からいろいろなことを探究したり、深めたりできるようなカリキュラムが準備されています。

これまでのように、ただ教えられることを覚えていくというスタイルを脱して、自分から興味のあるテーマを探し求め、調べていくという授業が主となります。また、それによって学んだことや考えたことをしっかり発信していく。それも日本語だけではなく、英語でもきちんと発信できるようになることを目指します。これからグローバル化がますます進む社会でグローバルパーソンとしてやっていけるような人材を育て、輩出したいということです。将来的には、この自己発信コースが十文字教育の核になっていくと思っていますが、2022年度は、まずは1クラスからスタートすることにしています。

――文部科学省もいわゆる問題解決型の教育を進めたいとしていますが、それに近いのでは？

そうですね。実社会でも求められている力です。自分で問いを立て解決する習慣を身につけてほしいと思います。

世の中には大学受験を心配する声もありますが、大学の入試も変わりつつあります。自己発信コースで3年間しっかり勉強すれば、間違いなく目指す大学に合格できると考えています。

生徒一人ひとりの個性に合った教育を

自己発信コースをスタートさせることが、本校の生徒たちをさらに成長させるきっかけになると考えています。

中学から入ってきた生徒たちを見ていても、個々の生徒たちの学び方の質とか個性などが、非常に多様化しています。それと同時に、今、十文字中学ではプレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなどの授業もやっていますが、「私はこう思う」「私はこれが向いている」とはっきりと言える生徒が増えています。私は、十文字高校に誕生する新しいコースで、そうした生徒たちが、より能力を伸ばし、才能を開花させることを確信しています。

日本ではこれまで、「同じ教室で同じ勉強をしなさい」という教育が行われてきました。ある意味で、子どもの個性は無視されていたのです。

それに対して、自己発信コースは、「一人一人の生徒が自分の個性を学びにつなげられるコース」です。私は、生徒たちが自ら興味を抱いたテーマを探究し、深く学ぶことで、「成績だけがすべてではなく、いろいろな生き方がある」と気づくことが大切だと考えていますし、そうした〝気づき〟が勉強にも活きてくると考えています。

――「自己発信コース」は具体的にはどんなコースになるのでしょうか？

まず、総合的な探究の時間を各学年で週4時間設けています。いわゆる数学だとか国語などといった学問領域の授業ではなく、総合的に考えて、哲学的なことも含めた大きな枠組みの中で学んでいく授業になります。

	Ⅰ期		Ⅱ期		Ⅲ期	
	1年	2年	3年	4年	5年	6年
目標	○学ぶ楽しさを実感 ○学習習慣の定着		○基礎・基本の定着 ○専門領域の関心を高める		○実践・応用力の鍛錬 ○専門領域の深掘り	
クラス・コース	全クラスともフラット ただし、数学と英語は 習熟度別クラス編成を実施		自己発信コース 特選 人文特選コース 特選 理数特選コース リベラルアーツコース			

同時に、発信能力を高めるために、スキル・ディベロップメント（技能開発・習得）という講座を設けて、リサーチ、ディスカッション、プレゼンテーションの3つを技法としてきちんと学びます。さらに、プロジェクトベースラーニング（PBL：問題解決型学習）という手法も取り入れ、目的をしっかり持って、自分たちで問題解決していく力を身につけていきます。

――「特選コース」、「リベラルアーツコース」とは、どのようなコースですか？

「特選コース」は、これまであった「スーパー特選コース」を継承するコースです。4年次（高1）の段階で「人文」と「理数」のいずれかのコースを選択します。とにかく勉強したい、上位難関大学への入学を目指したいという生徒に向いています。途中で志望が変わったとしても、コースの選択については、4年次から5年次になる際に、「人文コース」と「理数コース」の入れ替えができるよう、柔軟に対応します。

一方「リベラルアーツコース」は、幅広い教養をしっかり身につけたい生徒のためのコースで、5クラスほどの編成でスタートになるでしょう。

このコースの場合、4年次の段階では設けられた科目を一通りすべてやりますが、5年次以降は、自分に合った科目を選択できます。その際、文系科目でも理系科目でも選択できますし、音楽をもっとやりたいとか、美術をやりたい、あるいは体育をやりたいという生徒のための科目も設けられます。

大きく社会に関わる人材育成を目指す十文字

今、SDGs（持続可能な開発目標）が世界の大きな課題となっています。その中で求められているのは女性の力であり、女性の意識変革が叫ばれています。十文字学園は、これまでも大きく社会に関わり、貢献できる人材の育成を目指してきましたが、さらにそれを推し進めるべき時機が到来しています。

現在、十文字中学・高校では、昨年から、多くの大人と関わる、そして社会と関わることをテーマとして「Move onプロジェクト」を始動し、キャリアプログラムを充実させています。これは企業などの協力を得て、実際の企業活動を知り、学ぶことによって、「世の中ってこんなに積極的に動いているんだ。変わっていくんだ」ということを体験させることで、「自ら考え、協働できる人材」を育てようという取り組みです。これに参加する生徒たちを見ていても、十文字の生徒たちは、臆することなく、いろいろな活動に積極的に参加するという特性をすでに身につけています。また、自分たちでものごとを成し遂げようとする高い意識も持っています。これをさらに大きく開花させることが、新コース導入の大きな目的だと言ってもいいでしょう。

変わる！
十文字学園
巣鴨発

リモートの長所を活かして対面授業も生中継

浅見 武 十文字中学教頭

ICT（情報通信技術）教育の環境整備さらに

――よく耳にするのは、「十文字中高がいち早く取り組んできたICT教育（教育現場での情報通信技術を活用した取り組み）が、コロナ禍をきっかけに促進された」という声です。

浅見 本校ではICT環境の整備、例えば電子黒板などは5、6年前から設置が進んでおり、校内でPCや電子黒板などを使うことはできていました。大変だったのは、コロナ禍で生徒が学校に来られないので遠隔授業に踏み切るのですが、1人1台パソコンの整備が進んでおらず、各家庭にPCを送ったり、Wi-Fiの貸し出しなどの対応をしたことです。

先生方の先行的な協力 相互研鑽に感謝

――コロナ禍でも先生方の迅速な対応があったのではないかと思います。

浅見 2020年度4月からスキルの高い先生がリードする形で一層のICT化に取り組みました。ZoomやGoogleクラスルームの設定や使い方などを、動画を作ってHPに上げる手法を展開しながら、生徒や先生方に周知させる作業を中高ともに進めたのです。

――生徒ののみ込みはどうでしたか？

浅見 ソフトの設定ができて、使い始めたら生徒の方が早かったです。ただ当時大変だったのは、高校生は同じ機種のPCを持っていたのですが、中学生は各家庭でばらばらでPCやスマートフォンによってソフトの設定の方法が違うことが多々あり、その問い合わせに汗をかきました。

――教員の遠隔授業の進め方については、どう思われましたか。

浅見 動画配信で一方通行の授業を行うだけではなくて、Zoomなどを利用して生徒との間で質問や解説のやりとりする先生もいれば、グループごとに学習する先生もいたり、使い方は限定しませんでした。先生方が色々な工夫をされたおかげで、生徒を飽きさせずにリモート授業を乗り切ることができたと思います。

動画反復学習が生徒に好評

――生徒の反応はいかがでしたか。

浅見 Googleクラスルームなどを利用して動画配信すると、繰り返し動画を見ることできるので、「授業の理解が深まる」と生徒に喜ばれました。リモート授業の全てが良いというわけではありませんが、この点は良かったと思います。

――リモート授業は良かったでしょうか？

浅見 登校が難しい生徒もいましたので、一時的には良かったのかもしれません。2021年度からは、基本的に対面授業にしていますが、体育以外の授業は全て対面授業を生中継しています。クラスに生徒はいるのですが、事情があって学校に来られない生徒もいますので、家でも授業が受けられるようにしました。

さらに2021年度に入ってからは、学校でクロームブック（ノートPC）を購入し、中学生全員に貸し出しています。高校生はすでに1人1台所有しています。これにより、緊急事態宣言が出され学校に生徒が来られない状況になっても、自宅でオンラインの授業が受けられるようになりました。

――コロナ禍2年目にして生徒の側に何か目立った変化は現れていますか？

浅見 高校生には最初からパソコンを持たせていて、慣れるのが早かったこともあり、授業だけではなく、部活動や委員会などでも色々な場面でパソコンを使うようになりました。中学生は2021年度から活用が進み始め、アンケートや提出物などをデジタルで提出するようになってきています。もっとも生徒たちは、パソコンが利用できたとしても、やはり対面授業が良いと感じているようです。生徒は友だちと一緒に教室で色々な話ができることを望んでいます。そういう意味では、生徒自身が変わってしまったことはないと思います。

――先生方は成績をつける時はどのようにしていましたか？

浅見 先生方にはなるべく定期試験をしたいというジレンマはありましたが、2020年度は7月下旬の感染拡大の中、学校として期末試験は取りやめ、生徒の平常点や提出物のやり取りの状況を踏まえて1学期の成績をつけました。2学期以降は定期試験が行えたので、通常の成績評価に戻っています。

タスクノートで時間管理――勉強も部活も

――十文字らしさ、真摯な女性力の育成につながるきめ細かな学びを実感しました。コロナ禍に向きあって生徒が頑張っていると思う点はどこでしょうか？

浅見 部活などは時間制限をしているので、生徒は限られた時間の中で工夫して活動するようになったはずです。

本校では各生徒が「タスクノート」を用いて、日程の自己管理をしています。見開き2ページで1週間分のスケジュールの上段には毎日やるべきことを書き、下段には勉強時間を記入するのですが、やはりこれに基づいて自分をコントロールできた生徒は成績も上がっています。とりわけ生徒には、授業の復習だけでなく、自分から興味のあるテーマを深掘りする探究活動を心がけてほしいと思います。

そうして自分でキャリアアップしていく力を持たないと、今のグローバルな社会で生き抜いていくことはできません。コロナ禍の教訓を糧に、諦めるのではなく、「こういう状況だけど何ができるか」と考えていってほしいですね。

探究活動を成長のバネに

《探究型》部活動もオンラインを駆使して

巣鴨発SDGs――福島県の郡山女子大附属高と協同学習

十文字中学・高校教諭　サイエンスクエストクラブ顧問
黒田雅幸先生（数学担当）に聞く

――本校と福島県の郡山女子大学附属高等学校とのSDGsに関する協同学習も行われている、とお聞きしています。コロナ禍にあって、次の時代を切り拓く若者の学びを頼もしく感じさせる部活動の今を教えてください。

黒田先生　2018年度から数学部の顧問を務めていましたが、そのときに「数学部だから数学を学ぶ」という壁があると感じました。中高生の自由な発想を存分に発揮してほしいと考えている一方で「数学」という言葉が生徒自身を縛ってしまっていると思い、あえて「クエスト」を付け加え、壁のない活動を目標にしています。現在は中学1年生から高校2年生まで11名が色々な活動にチャレンジしてくれています。その活動の1つとして郡山女子大学附属高等学校と協同学習を行っています。

――両校の協同学習はどのようにして始まったのですか。

黒田先生　私の学生時代（東京理科大学大学院）の友人が郡山女子大学附属高等学校に勤めていて、2020度にコロナ禍で普通の学校生活が送れなくなってしまったとき、生徒に対して、学校でしかできない“何か”を体験させてあげたい、と話し合っていく中で決まりました。十文字はすでにオンラインで授業をすることが可能となっていたため、「距離の壁」はもうないと思っていました。

――SDGsは、地球的視野から「誰一人取り残さない」ことを誓っています。世界と地域を細やかな女性の目で見つめて実践するプロジェクトに十文字の生徒が汗を流す姿に感動を覚えます。

黒田先生　意義深いのは、これまでに東京の豊島区（2020年）も郡山市（2019年）も「SDGs未来都市」として国から選定された共通点があったことです。それでプロジェクトでは両校のメンバーがそれぞれ豊島区と郡山市の担当部署の方から行政の取り組みなどを聞いて発表テーマをまとめ、両自治体の取り組みを比較分析し、両校で組んだペアチームごとにMeetで議論し合い自分たちにもできることは何か、また新しい解決方法があるのかを探りました。

＊　＊　＊

〈インタビューを終えて〉黒田先生は、自身の目指す教師像を、コロナ禍だからこそ、「むしろ積極的に楽しんで、課題に挑戦し続ける姿勢」の大切さを何度も繰り返した。

コロナ禍で本校がリモート授業に入った2020年度前期早々、新入生がいる高校1年生の学年ではパソコンの使い方に悩む生徒たちがいた。30件近い問い合わせや相談に対し、黒田先生は、連日のように電話で連絡し合い、個々のケースごとに原因と解決法を探ってネック解消に努め、「誰一人取り残さない十文字の教育」の先頭に立ち続けた。

長丁場の困苦を逆手にとって十文字の各生徒が人間として成長する過程は、こうした多くの先生方の「あきらめない姿」と共にあったと言えるだろう。

（立ちてかひある取材班）

変わる！
十文字学園
新座発

女子教育「一世紀の伝統」から新しい十文字学園文化の創出を！

志村二三夫 十文字学園女子大学学長

2年越しのコロナ禍で、学生たちを取り巻く状況は大きく変わった。感染者が急増する中、対面授業ができなくなり、オンライン授業が当たり前となり、緊急事態宣言時には、キャンパスから学生の姿は消えた。そんな中、十文字学園女子大学は、いち早く「新型コロナウイルス感染症対策ガイドライン」を策定してレベル1～3までの行動制限レベルを設けるとともに、同時双方向方式を主とする遠隔授業と対面授業を組み合わせたハイフレックス型授業を、分散型で実施してきた。

そして今、十文字学園女子大学では、それらの成果をベースにより新たな学園像を目指している。これからの十文字学園の未来について、志村二三夫学長と安達一寿副学長に話をうかがった。

加速する、次なる世界の変化に向けた新たな動き

2019年12月に中国で発生した新型コロナウイルスは瞬く間に世界に広がり、多くの感染者を出し、人間社会の脅威となりました。しかし2022年を迎え、新型株の蔓延はあっても、大局的には出口が見え始めたようです。

そこで浮上するのが、私たちの社会が完全に元の状態に戻れるかという大きな問題です。この点について多くの人が「人の接し方とか距離の置き方が大きく変わり、もう元に戻るのは難しい」と指摘しています。実際、これからの社会は、コロナ禍での体験を通して身につけた新たな知恵や貴重な経験をベースに、次なる世界に向けた新たな動きが加速するでしょう。

たとえばICTを活用した「人間社会のスマート化」はさらに進み、経済・文化活動にも大きな変化が生じていくかもしれませんし、その中で大学の在り方も、学生それぞれの学び方も大きく変わっていかざるを得ないでしょう。私はそういう意味で、今こそ次の時代を見据えた議論が必要となっていると思います。

コロナ禍をチャンスととらえ新たな発展の足掛かりに！

およそ人類の歴史を振り返ってみると、何十年かおきに起きる、災害などのどちらかといえば不幸なできごとがエポックメイキングとなり、次の時代につながる新たな動きも、ひとつひとつになっていくのではないでしょうか。たとえば、本学ではコロナ禍において積極的にICT化を進め、ハイフレックス型の授業の導入、分散型の授業などを進めました。コロナ禍という災いを前にやむを得ずそうしたのですが、これをチャンスととらえ、次代につないでいくべきでしょう。

学生に対して行った、2020年度後期の分散型・遠隔授業についてのアンケート結果を見ると、「全体として満足できたか」という質問に対し、「あてはまる」が12・8％、「ややあてはまる」が51・7％と、64・5％の学生が肯定的にとらえているようです。しかし、私としてはまだ不満があります。十文字学園女子大学にはまだまだ進化させていく余地があると思っています。実際、学生のほうが高い適応能力を見せているのに対し、教職員のほうがうまく進められず、苦労する場面も多かったようです。

その一方で、「瓢箪から駒」ではありませんが、いち早くハイフレックス型授業を導入することで培ったスキルや経験値は大きな財産となったと思います。

たとえば実際にハイフレックス型授業を行ってみた結果、授業内容によっては対面授業よりも遠隔授業のほうが効率的で、学生の習熟度も上がる場合もあることが明らかになってきました。それをさらに活用・発展させることで、十文字学園ならではの、新しく魅力的なカリキュラムを生み出していけるのではないかと期待しています。

ただし、安閑としてはいられません。インターネットを使えば、他の大学の授業も簡単に履修できる時代になりつつあり、日本の大学の8割以上が「単位互換制度」を取り入れています。また大規模な公開オンライン講座「JMOOC（ジェームーク）」もスタートしています。MOOCとは、2012年にアメリカでスタートした無償教育サービスで、オンラインで大学レベルの授業を無償で公開し、修了条件を満たした受講者には修了証が提供されます。その日本版がJMOOCであり、日本オープンオンライン教育推進協議会により、2014年から公開講座が開始され、2020年5月時点で受講者は延べ122万人に上っています。

つまり、学生にとっては選択肢が広がる半面、それぞれの大学の魅力（カリキュラムの内容や、教職員の能力等）が厳しく問われることになるわけです。

学園歌に込められた十文字学園の理念が出発点

ここで思い出していただきたいのが十文字学園の学園歌です。

「身をきたへ　心きたへて　世の中に　立ちてかひある　人と生きなむ」と謳われる歌詞には、学園を立ち上げた十文字こと先生の想いと十文字学園の根本理念が込められています。

この歌詞に込められた理念を〝意伝子（いでんし）（ミーム）〟として、まず全教職員が、「自らを鍛え、そして人のために尽くす人材を育てていこう」という思いを持ち、その思いを学生諸君に伝え、共有できるキャンパスを築いていく努力を忘れないことです。

それがアフターコロナ時代に求められる十文字学園の出発点だと思います。

また、これからの日本社会を考えたとき、女性の活躍が期待されていることは明らかです。そして、そのための女性の生き方もどんどん議論されるでしょうし、あるべき姿も見えてくると思います。

十文字学園女子大学としては、そうした動きを敏感にとらえつつ、しっかりと地に足をつけて歩んでいくべきでしょう。

また、私がよく口にすることですが、人は「じんかん」により鍛えられます。十文字学園は、まさにそのための学びの場であってほしいと思います。

人は〝じんかん〟により鍛えられる

よく人間性が大切だと言われますが、人間性とは極めて難しい概念です。この概念を理解するには、人間という漢字が持つ「にんげん」とは別の読み方「じんかん」がヒントになります。

「じんかん」は文字通り、人と人の間、つまり人間関係や世の中・社会のこと。生物学的存在であるヒトは、じんかんにより鍛えられ、社会・文化的存在へと成長します。人間性を豊かにするには、このように人間関係・世の中・社会による鍛えが大切です。

そうした鍛えの場となるのが、十文字学園女子大学のキャンパスであり、学友・教職員・地域の人々のじんかんによる鍛え（切磋琢磨）を通し、豊かな人間性と、社会で求められる多様な人たちと共に力を合わせて働く「協働の力」を育んでいくことが求められます。

本学は1996年スタートで、建学25年とまだ若い大学ですが、そろそろ〝じんかんによって鍛えられ、社会の中でリーダーシップを取っていく人材〟が続々と出てきてほしいものだと思っています。

忘れてはいけないメンタルヘルスケア

ところで、忘れてはならないのがメンタルヘルスケアでしょう。コロナ禍で、学生たちの孤立化、孤独化は疑いなく進んでしまいました。もちろん本学では学生総合相談センターや健康管理センターに医師やカウンセラーも配置していますが、そうした問題はなかなか表に見えづらいものです。これから徐々に普通の対面授業に戻っていく過程で、学生諸君らがどう反応していくかにも、十分な注意を払う必要があると思っています。

また、学生の中には「遠隔授業のほうがよかった。前の世の中のほうが生きづらい」と感じるような学生も一定数存在しています。それが、急に元に戻る（対面に戻る）となった場合、なかなか適応できないケースも出てくるでしょう。そういう学生にどんなメッセージを発していくか、私たち教職員も含め、学生諸君も十分に気をつけていかなければならないと思っています。

変わる！
十文字学園
新座発

コロナ禍の経験でつかんだ 十文字学園女子大学の未来像

安達一寿 十文字学園女子大学副学長（教育担当）

模索が続いた同時双方向型遠隔授業

2020年2月、いよいよ日本でも新型コロナウイルスの流行が問題となったとき、最初に懸案になったのは予定していた卒業式をどうしようかということでした。多くの大学で卒業式が中止になりましたが、十文字も延期に。なんとか年度が明けた秋に開催しようとしましたが、それもできませんでした。

また、次に問題となったのは、どういう形で授業を行うかという点でしたが、文部科学省から「オンライン授業を導入してやってほしい」という通達があり、大学としては危機対策本部を立ち上げ、対応を議論して、3月の終わりごろから、オンライン授業の準備に取り掛かりました。

まずは学生側の準備。パソコン、インターネットが自宅にない学生もいましたから、大学のコンピュータを貸し出すと同時に、自宅にインターネットを引く費用として全学生一律に3万円の支援金を支給しました。

その一方で、大学の教員に対する支援も急務となりました。教員の多くは、メールやパソコンは当然使えましたが、遠隔授業はやったことがない人がほとんどでした。そこで、ネットや遠隔授業のことがわかる教員が中心となってプロジェクトチームをつくり、3月上旬から中旬にかけて、Zoomや学修支援システム（LMS＝ラーニングマネジメントシステム）の研修を実施しました。

このとき、最も念頭に置いたことは、どうしようもないときはオンデマンド型もやむを得ないとしても、基本的に同時双方向型の遠隔授業にしようということでした。

授業というのは、学生と教員の相互のコミュニケーションがあって成立するものですし、それが本学の特長のひとつです。それを担保するという意味でも、リアルタイムで学生と教員がやり取りできる同時双方向性が重要だと判断したわけです。

とはいえ、やったことのないことですから、学生側がちゃんと遠隔授業を受けられる状況にあるかどうかの確認はもちろん、実際に回線をつないで遠隔授業を始めるまでは、かなり混乱が続きました。

しかし、刻々と事態が変わっていく中でも、同じ内容の授業を対面と遠隔で同時に実施するハイフレックス型という、これまでになかった学生目線の授業体制を整えていくことができたと思います。

急ピッチで進められた学生本位の設備刷新

スムーズにハイフレックス型授業を行うためには、設備の刷新も必要でした。

遠隔の授業で重要なのは、画像より音声です。そこで後期からは教室のマイクの音声が直接、ズームに流れていくようにして、教室の中で学生がしゃべる声もマイクが拾うことができるようにしましたし、比較的規模の小さな教室では遠隔も対面も関係なく、みんながその場にいる臨場感に留意し、ディスカッションができるようにするために集音マイクを設置するなどしました。

また画像については、大教室を中心に、たとえば天井にカメラを設置しました。そうした工夫により、授業でのスムーズな相互やりとりも確保できるようになったと思います。

こうしてハイフレックス型授業を進めていく中で、新しい発見もありました。

ハイフレックス型授業で見えてきた新たな発見

対面の授業では、学生に発言を促しても、なかなか手が挙がらないという側面がありました。ところが、ハイフレックス型だと、遠隔授業を受けている側の学生が意外と積極的に発言してくれるという新たな発見がありました。

対面だとどうしても周りの人を意識してしまうのに対し、ハイフレックスでも遠隔（自宅）で授業を受けている学生は周囲に誰もいませんから、ストレスなく自分の意見を発信できるのでしょう。

また、たとえば共通科目などについては、オンラインを使えば、新入生全員に対して授業をするということも可能になります。これまでは物理的な制約があって、人気のある授業が取れないこともありましたが、遠隔授業なら人数制限の枠もなくなります。

つまり、対面と遠隔をうまく組み合わせることで、より密度の濃いカリキュラムを組むことができるというわけです。これは、学生諸君にとって非常に大きなメリットです。

そういう意味では、ハイフレックス型授業をうまく活用することで、授業をより活性化できる可能性が見えてきました。

私は、こうしたハイフレックス型授業の利点を大いに活かしつつ、十文字学園の授業の在り方をさらに進化させなければならないと考えています。

ソサエティ5.0時代に求められる多様性、独創性のある大学像を

実は今、日本の教育の流れは大きく変わろうとしています。たとえば小・中学校では、すでにギガスクール構想がスタートしています。小中学生1人ひとりに対して1台のコンピュータを配置して、それを授業に使っていきましょうというものです。

これは、「ソサエティ5.0」を目指すという国の方針に従ったもので、コロナ禍以前から進められていた施策です（図参照）。

実際、社会全体でテレワーク等、オンラインを活かした働き方が広がりつつありますし、それは世界的な潮流となっています。

そしてアフターコロナ時代を考えたときに、その動きがますます加速していくことは明らかです。

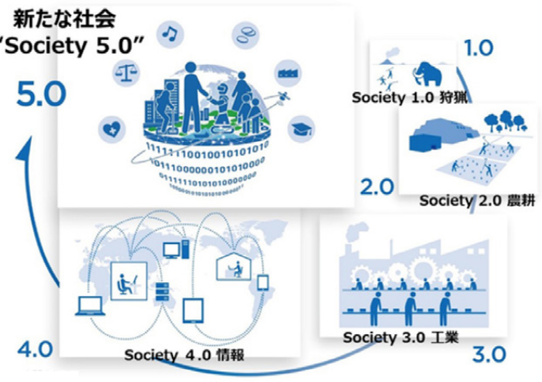
もう、新型コロナ禍以前に戻ることはないでしょう。

そんな現実を踏まえたとき、十文字学園女子大学に、なにより求められているのは、学生諸君が来るべき新しい時代に対応できる能力を確実に身につけられる場にしていくことです。

幸い、本学には、学生と教員の近さ、学生同士の仲の良さ、協働してものごとに取り組む姿勢など、創立以来の伝統に裏打ちされた文化があります。

また、コンパクトだからこそ、多様性に富んだ学生を数多く生み出す下地もあります。

今後の大学教育の展開を考えたとき、そうしたことも含めながら、よりオリジナリティーに富んだ大学を目指していかなければならないと思います。



ソサエティ5.0とは

ソサエティ5.0とは、狩猟社会（ソサエティ1.0）、農耕社会（ソサエティ2.0）、工業社会（ソサエティ3.0）、情報社会（ソサエティ4.0）に続き、新たにサイバー〈コンピュータ〉空間とフィジカル〈現実世界〉空間を高度に融合させた人間中心の社会の実現を目指そうというものです。

出典：内閣府ホームページ

学園創立100周年記念 オンライン講座が大好評！

「そして、映画は作られた！　映画の内幕お話しします。」

【前田哲監督プロフィール】
東映東京撮影所で大道具のアルバイト、美術助手などを経験した後、フリーの助監督として多くの監督作品に携わる。1998年に、相米慎二総監督のオムニバス映画『ポッキー坂恋物語・かわいい人』で劇場映画監督デビューした後、数々の話題作を生み出している。2009年度より、2013年に退任するまでは東北芸術工科大学デザイン工学部映像学科准教授も務めた。

映画監督 前田哲さん

2021年11月3日の文化の日、十文字学園女子大学は2022年の学園創立100周年記念として、映画監督の前田哲氏を招き、オンライン講座【そして、映画は作られた！　映画の内幕お話しします。】が開催されました（文芸文化学科・新座市内大学公開講座共催、埼玉まなびぃプロジェクト協賛事業）。

10月29日には監督の新作映画『そしてバトンは渡された』が、10月30日には『老後の資金がありません！』が封切られたばかりで多忙を極めていらした監督でしたが、講座では新しい時代のエンターテインメントの展望について語っていただき、講演後にも交流の場をもうけて、学生たちの質問に答えてくださいました。

1時間30分があっという間だった前田監督の講演

「今回、このような場にお招きいただいてありがとうございます。非常に光栄です」という前田哲監督の言葉で始まった講演は、途中、『そしてバトンは渡された』と『老後の資金がありません！』の宣伝用の映像やメイキング映像も流しながらの楽しい講演となりました。

監督は、「キャスティングは映画の顔であり、演出の8割を占める」と考えていらっしゃるそうです。

また、「コロナで窮屈な中、弱者の方、マイノリティーの方、そして子どもたちが一番しんどいと思うのですが、映画は面白いものじゃなければいけないし、心を揺さぶるものでなくてはならないと思っているんです」「監督の仕事は、俳優陣をまとめるんじゃないんです。50人の制作スタッフ、50人の出演スタッフがいれば、100の頭で考えられる。映画が総合芸術といわれるのはだからこそなんです」など、映画づくりの内幕や監督ご自身の映画に対する思いも話してくださいました。

オンライン講座を聴講した学生たちからの熱い反響

講演を聞いた学生たちは、前田監督の言葉に多くのことを気づかされました。代表的な感想と、前田監督にいただいた元気の出る言葉を次ページで報告します（井上彩里さん〈文芸文化学科4年〉）。

交流会でいただいた前田監督の元気の出る言葉

面 倒くさいことをやればやるほど、必ず注目してくれる人はいるし、違う面が見えると思う。僕はそうしてきた。自分は才能あるとは思っていないから、努力しなきゃ追いつかない。面倒くさいこと、しんどいこと、回り道をすることをどう楽しむか。その過程でなにかと出会うことがあるわけで、それができたら人生面白い。

愛 というのはすごく大事だけども、絶対的なものじゃない。裏切られることもある。それを自分でどう思うかということが大切です。

周 囲の人は勝手なことを言います。どこに就職するの、就職したら夢あるの、いつ結婚するの……。ほっとけって思いません？　僕はそう思う。

楽 しく生きましょう。「なにしてんだ」「だめだ」って言われることがあると思いますが、それをそのまま受け取るか、頑張れと取るかは自分次第です。言っている本人がいじめのつもりで言ってようが、励ましているつもりで言ってようが、どっちでもいいんです。自分がどう取るかですから。

自 分の人生を決めるのは自分です。誰も代わりに生きてくれません。周囲にがんじがらめにされるのではなく、自分の好きなことを原動力に頑張ってみてはどうでしょう。

ト ントントンと上がっていく人はなにか挫折したときにコロコロコロと転がっちゃう。人生、何が幸いして何が災いするかわからない。時間がかかっても自分のペースで生きていけばいい。

『老後の資金がありません！』 は、僕の中では〝女性解放の映画〟なんです。日本社会における女性はまだマイノリティーの立場に置かれていますが、もっと自由に生きていい。「人生わがままに生きたほうが勝ちよ」というのがこの作品のテーマです。

【聴講生の感想】

今回の講演を聞いて今まで以上に映画への興味が湧きました。まず、どのように映画をつくるのかという点が印象に残りました。『老後の資金がありません！』でいえば、天海さんの周りの人をどうキャスティングをしていくか考えていたとおっしゃっていましたが、そのキャスティングも絶妙なバランスだなと思いました。

老後というとネガティブなイメージがありますが、それらをエンターテインメントの希望の物語にしていくという、前田監督の映画のつくり方が印象に残りました。また、「完璧や完全はないし、そうでなくても良い」という言葉が特に心に残りました。「誰かに何か言われても、自分の好きだという気持ちを原動力として次へ活かしていくという姿勢」を、私も忘れないようにしたいです。

私は教員になりたいと思っていますが、監督の「子どもたちは未来だ」という言葉がとても心に残っています。また、「映画を撮っていて、自分のイメージ通りのものが撮れるとつまらない。それよりも想定外のもの、超えるものがあることに価値がある。はみだしているからこそ楽しい」というスタンスであるということをお聞きしました。それは、私が教育現場に出たときも忘れずに持っておきたい気持ちだな、と強く思いました。

私は「自分が一番好きなことを続けるべきだ」というお話にとても感動しました。人生の中で、自分は一番何が好きなのか、何をしたいのか、まず自分と向き合うことが今の私たちには必要なんだと思いました。

写真左は司会の好本惠教授（文芸文化学科）、右はコーディネーターの松永修一教授（文芸文化学科）

フードパントリーが広げる地域の絆（きずな）

格差・分断社会に橋を架ける思いやりを培（つちか）う支援活動が育む十文字スピリット

星野敦子 地域連携推進センター長

十文字学園女子大学の「地域連携推進センター」は、学生と共に子どもに関わる活動や高齢者と共に自然保護を目指した組織づくりなど、地域密着型の活動を企画・運営してきましたが、コロナ禍において、その存在意義がますます高まってきています。十文字の学生たちが目指すところは何か、センター長の星野敦子教育人文学部児童教育学科教授にお話しいただきました。

1992年に十文字学園女子短期大学専任講師となり、2011年より十文字学園女子大学人間生活学部教授および、大学開放・地域連携推進センター（現・地域連携推進センター）長として、地域活動に力を注いでいる。

東日本大震災の被災地支援活動からのスタート

本学に大学開放・地域連携推進センター（現・地域連携推進センター）が設立されたのは、東日本大震災直後の2011年4月のことでしたが、その後、「地域連携ボランティアサークル」の立ち上げを契機に、「福島・石巻支援活動」、「緑のバトン運動」（被災地の苗を植樹）などに参加してきました。たとえば、「緑のバトン運動」は被災地の苗を預かって育成し、現地で植樹を行うというもので、児童教育学科の学生を中心に4年間継続しました。

参加した学生たちは、現地で被災地の現状を視察すると同時に、語り部のお話をお聞きすることなどで、意識を大きく変え、支援活動の大切さをより深く考えるようになったように感じます。

さらに本学の地域連携活動は、本学の地元である新座市でも広がりを見せています。

新型コロナの影響が大きくなる中、埼玉県と新座市の経済振興課の方といっしょに大学まで来られた新座市栄4丁目商店会の会長と副会長さんから「これからは大学も商店会と連携して、地域を盛り上げてほしい」と要請されたことがきっかけでした。そしてコロナ禍が深刻化する中、2021年7月から、商店会の全面的な協力のもとで、商店会のフリースペースをお借りして、「子育て支援フードパントリー」（子育て家庭向け食料品等無料配付会）を展開することとなりました。

コロナ禍で高まった地域ボランティアの必要性

「子育て支援フードパントリー」では毎回50～80世帯分の支援物資を準備して提供させていただいていますが、学生たちが子どもたちといっしょに遊んであげている間、3時間ほどひとりでお茶を飲んでいらっしゃるお母さんがいらっしゃいました。

コロナ禍でつらい思いをしながら懸命に子育てしている中、フードパントリーに足を運ぶことで、ほんの少しだけでもホッとする息抜きの時間が持てたのではないでしょうか。

でも、孤立し、つらい思いを抱えているのはこのお母さんばかりではありません。そんなつらい思いをしている人は以前より確実に増えています。

新型コロナウイルスの影響や社会の多様化が進む中で、様々な意味での格差が急速に拡大しているからです。

その格差を解消するために、法制度も徐々に整備されてきましたが、今、実際に追い詰められ、苦しんでいる人たちを支えている大きな原動力は、地域で地道に活動しているたくさんの方々です。

こうしたインフォーマルな活動とフォーマルな「制度」との間に橋を架けるのも私たちの仕事であると感じています。

人に寄り添う気持ちが自分自身を成長させてくれる

フードパントリーの活動には、多くの利用者のみなさんから、メールやラインで感謝の気持ちが届けられています。そんな感謝の言葉に、逆に励まされた学生も多いようです。

今、日本中の大学で少なからぬ学生がコロナ禍で経済的に追い詰められていることが大きな問題となっています。また、経済的には問題がなくても、精神的なつらさを感じている学生も多くなっています。

でも、そういう学生は決して自分の苦しさを見せようとはしません。ぎりぎりのところまでつらさを抑え、耐えようとしていますし、むしろ率先して支援活動にいそしむことに意義を見出す人もいるのです。

そんな中で、多くの人々からの感謝の言葉は、学生たちへの励ましになると同時に、彼女ら自身の自己肯定感と成長にもつながります。人に寄り添う気持ちが、自分自身を成長させてくれるのです。

私は、本学の学生はもちろんですが、日本中の学生たちに、様々な人たちとの交流を通して、人として求められる大切なことをいろいろ学んでもらいたいと思います。

新たにスタートさせた「森のプレーパーク」

私たちは、「子育て支援フードパントリー」に続いて、2021年11月から、本学の地域連携共同研究所と連携する形で「森のプレーパーク」（子どもの冒険遊び場）という活動もスタートさせています。

本学構内の雑木林を舞台に、地域の子どもたちにノビノビと遊んでもらおうという取り組みです。学生としてどのような活動が望ましいのかを熟考し、「福祉制度としての貧困対策」とは異なる、親も子も安心して楽しく過ごせる地域のコミュニティーをつくることから始めています。

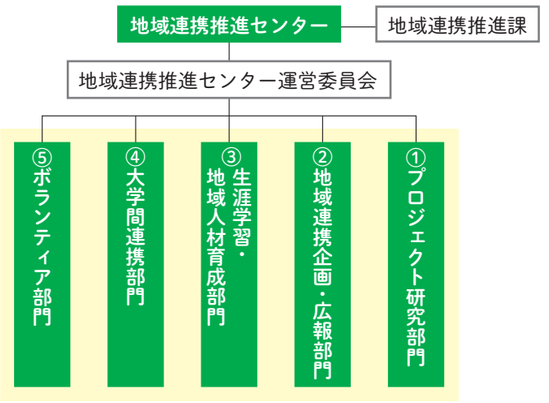
この森のプレーパークの活動では、本学の児童教育学科の学生と人間福祉学科保育コースの学生が、それぞれの専門性を生かしてイキイキと活動しています。その様子を見ながら、私自身、地域の核としての本学の未来が映し出されているように感じています。

十文字の学生として、「地域で学ぶ」という視点を持って活動をつなげていき、その活動の中から様々なことに共感し、挑戦していくスピリットを持ってほしいと願っています。

地域の子どもたちと十文字女子大の学生たちの新たな交流の場となった「森のプレーパーク」（2021年11月28日、新座キャンパス）

フードパントリーで支援物資を準備する学生たち（2021年7月12日、新座キャンパス）

地域連携推進センター組織図（2022年1月現在）



十文字こと物語 第3回

熱き女子教育への想い

【創立者生誕150周年を迎えて】

（1870～1955）

十文字学園創設者である十文字こと（旧姓：高畑）は、1899（明治32）年4月25日に、十文字大元と結婚した。

「あなたも、もうすぐ30歳です。そろそろお嫁にいかないと」と言って、この縁談話を持ってきたのは、女子高等師範学校の恩師である安達安子であった。相手は、ことより2歳年上で、アメリカの大学や商業学校で学んだのち、東京で兄と会社を起こした実業家だということだった。安達はさらに言葉を続けた。「とてもいい話だと思います。人が勧めるうちにいかないと、いきそびれることになってしまいますよ」

ひょっとしたら、その恩師の言葉が決定打となったのかもしれない。ことは後年、「自分が常に信頼している安達先生のお勧めなので、先生の言葉を信じて、なんとなく決心したのです」と語っている。しかし、このなんとなく決意した大元との結婚が、ことの教育者としての輝かしい人生をつくりあげていく大きな起点となっていったのである。

結婚と教育現場への復帰

十文字大元と結婚後、ことは神田区駿河台（現在の千代田区神田駿河台）に建つニコライ堂の真下にある広々とした借家に住むことになった。その家には大元の母、姉、さらに職工見習いの若者も3～4人住んでおり、妻として果たさなければならないことは多く、新婚だからとのんびりしているわけにはいかなかった。そればかりではない。姪たちの勉強もみてやったし、神田区須田町（現在の千代田区神田須田町）にあった十文字兄弟商会まで出かけて、会社の事務会計や同時に同社が発行していた『農業雑報』などの校正なども手伝った。

結婚して10カ月後の1900（明治33）年2月には、神田区神田淡路町（現在の千代田区神田淡路町）に一軒家を購入して転居し、同月12日には長女（なか）が誕生し、母親としての務めも加わった。

さらに1902（明治35）年4月には、請われて私立日本女学校（現在の相模女子大学の前身）の教諭として教育の現場に復帰した。ことの女子教育にかける想いは、結婚後も決して失われてはいなかった。また、大元もそれをよく理解していたに違いない。大元は、ことの教職復帰を快く認めた。

「金門商会」設立とことの決意

当然のことながら、ことは多忙を極めることとなったが、嬉々として、妻、母、そして教育者としての生活を送っていた。

そんなある日、大元の兄から大元に対して「十文字兄弟商会を無条件で譲ってほしい」という提案があった。突然の話だったが、常に兄を尊重していた大元は独立する意思を固め、新たに電池製造を事業の柱とする会社を立ち上げることにした。

そんなさなかの1903（明治36）年5月には次女（みち）が誕生。一方、大元は、同年11月、農商務省の委託を受けて、風車などを調査するために渡米した。その留守を、ことはしっかりと守った。

1904（明治37）年3月、アメリカから帰国した大元はいよいよ新会社設立に向けて動き出した。そんなある日、東京高等工業学校（東京工業大学の前身）の校長を務めていた手島精一が外国製のガスメーターを持って訪ねてきた。それまで日本はガスメーターを海外からの輸入に頼っていたが、折から日露戦争が勃発。海外からの輸入が難しくなり、国産化が急務とされていた。手島は、大元に「なんとか国産化を実現してほしい」と頼みにきたのだ。

あいにく、大元は留守にしていたが、ことはそれを帰宅した夫に伝え、職工の手を借りながら自宅の風呂場で試作を開始した。「お国のために」という思いだった。それだけではない。ことは新会社の事務所探しにも奔走。同年8月には、千代田区猿楽町（現在の千代田区神田神保町と西神田あたり）に工場を新設して初の国産ガスメーターの製造を開始した。

1905（明治38）年2月24日に長男（俊夫）が誕生すると、ことは同年3月、日本女学校を退職した。まずは3人の子どもの母としての役割を果たしつつ、妻としての事業を支える道を選択したのだ。

夫・大元を突然襲った脊髄炎と巣鴨への転居

ことが日本女学校を退職した翌月、大元は工場を神田区三河町（現在の千代田区内神田1丁目と神田司町2丁目あたり）に移し、従業員も12名から30名に増員、新会社を「金門商会」と名づけた。大元が若かりし頃に過ごした米国サンフランシスコにあるゴールデンゲート（金門海峡）にちなんだ命名だった。また、それと同時に下谷区上野西黒門町（現在の台東区上野1丁目あたり）に拠点となる事務所を置いた。

しかし、事業はなかなか軌道に乗らず、一時は経営難で従業員の半数を解雇せざるを得ないところまで追い込まれた。さらに健康そのものだった大元が、突然の病魔に襲われた。

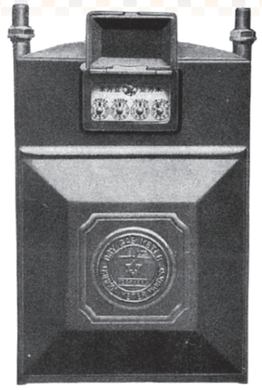
1905（明治38）年10月末、大元は風呂に入っていたとき、足の関節が思うように動かないことに気がついた。手も思うように動かない……。大元はすぐに友人の医師に連絡、その日の夜には東京帝国大学医科大学（現在の東京大学医学部）の附属医院に入院した。診断の結果は脊髄炎だった。そして、病状は自力では歩けなくなるほど悪化していった。主治医の見立ては「今の医学では完治は難しい」という厳しいものだった。

それは、ことにとって衝撃的な言葉だったに違いない。しかし、

夫の理解あってこその妻の志

長女（なか）の誕生を記念して、大元と撮った家族写真。1900（明治33）年

西黒門町時代の金門商会。写真提供：アズビル金門



金門商会が開発した国産初のガスメーター「十文字乾式A型」

ことは気丈だった。3人の子どもの世話や家事、会社の仕事もこなしながら、できる限りの時間を病院で過ごして、大元を献身的に看病した。

そして半年後、大元は退院して、自宅で静養することとなった。決してよくなったわけではない。主治医からは、「そう長くは生きられない。だいたい3年、長くて5年、それ以上は保証できない。覚悟しておいたほうがいい」と告げられた。もうこれ以上の治療法はないと、いわば匙を投げたようなものだった。

退院後、大元は、ことの手を借りながら、あらゆる療法を試みた。中には多少の効果がみられる療法もあったが、病状は一進一退を繰り返した。

「事業を畳み、静養したほうがいい」と勧める人もいた。もちろん大元のことを思ってのことである。

だが大元は「人間は仕事をするために生まれている。病身だからといって、田舎に引っ込むなど思いもよらないことだ」と強い信念を口にした。ことは、そんな大元の想いを汲んで、育児、家事をこなしながら、大元の看病と会社経営のサポートに徹する覚悟を固めた。

大元の退院後、一家は神田淡路町の家を引き払い、上野西黒門町の金門商会に転居した。喜ばしいことに、その頃から海外からのガスメーターの輸入が途絶えたために、金門商会製のガスメーター（十文字乾式A型）の需要が拡大し、予想していたとおり、売上も伸びていった。

1911（明治44）年3月には三女（よし）が誕生した。大元は、1911（明治44）年に北豊島郡巣鴨町（現在の豊島区駒込、巣鴨、南大塚のあたり）に3800坪の土地を購入、翌年の1912（明治45）年5月には新工場を完成させ、同年11月には自宅も同町に転居した。以来、巣鴨が十文字家の拠点となった。

その当時、大元の母も健在で、十文字家は工場の従業員らも含めると20人近い大家族になっていた。家庭内は円満で和気あいあいとした空気に満ち溢れた。ただひとつ心配だったのが大元の健康だった。

自彊術との出会いと感染症に勝った金門商会

症状は軽くなっていたものの、相変わらず一進一退が続いていた。

そんなある日、大元とことは手技療法士・中井房五郎の名を耳にし、彼の治療院を訪れた。1914（大正3）年12月のことだった。

当初はそれほど期待していなかった。だが、その出会いが大元の人生を大きく変えることとなった。最初は半信半疑で中井の施術を受け始めた大元だったが、治療を続けるうちに、みるみる健康を取り戻していった。

その劇的な効果を実感した大元は、中井に彼の施術を誰でもできる体操にすることを提案。中井が考案した体操を「自彊術」と名づけて、自社工場に道場をつくって従業員たちに実践させると同時に、私財をおしげもなく投じて、広く社会に普及するための活動を開始した。

まさにノブレス・オブリージュの実践だった。ことも自彊術を実践し、大元の活動を支えた。そして、その活動はすぐに実を結ぶこととなった。

1918（大正7）年、第一次世界大戦のさなかのアメリカで謎の感染症が報告されると、あっという間に世界中に広がった。「スペイン風邪」（新種のインフルエンザ）である。

十文字家・家族写真。写真右から、こと、三女（よし）、長男（俊夫）、大元、次女（みち）、長女（なか）

日本でも多数の患者が感染し、1918年8月～1921（大正10）年7月までの間に2380万4673人が感染、38万8727人が亡くなったとされる。

しかし驚くべきことに、そんな大流行の中でも、金門商会からひとりの感染者も出さなかったのだ。それが新聞で報じられ、大きな話題となった。

こうして、大元とことの協力で、自彊術は全国へと広がっていくこととなったのである。

工場全焼を乗り越え新工場の建設へ

すべてが順調だったわけではない。1917（大正6）年8月には、工場が火災で全焼してしまった。

だが、大元とことは、すぐに仮工場を建設して、それを稼働させながら、新たな工場を建てることを決定する。金門商会には逆境を跳ね返すだけの力がすでに備わっていた。

1920（大正9）年3月には新工場が稼働した。新工場の建坪は約2000坪と、旧工場の2倍の広さだった。自彊術道場をはじめ、娯楽室、図書室、テニスコート、相撲場、弓道場も併設されていた。

また、社内には日常品供給部を設け、産地から大量購入した米、味噌、醤油などの生活必需品を廉価で提供した。

言うまでもなく、従業員の健康を守るとともに、生活の質を向上させるためだった。

さらに、社宅や寄宿舎も完備しており、寄宿舎には学科教室も設けられ、専門講師による修身、機械学、国語、英語、数学などの授業が行われ、3年間で卒業するカリキュラムが組まれていた。

この〝金門学校〟の運営の柱となったのは、教育現場に精通していた、ことだった。

そして、新工場が軌道に乗ったある日、大元はことに話しかけた。

夫唱婦随で全国に自彊術を普及

自彊術道場と大元
出典：文華高等女学校「第一回卒業生記念写真集」

巣鴨道場で行われた自彊術の新年大会の模様
出典：国立国会図書館デジタルコレクション『予の実験せる自彊術』大正３年、松平康国著

文華高等女学校の第一回卒業生たち。出典：文華高等女学校「第一回卒業生記念写真集」

文華高等女学校の校舎
出典：『十文字こと自彊不息』

金門商会の新工場
出典：『十文字こと自彊不息』

「私がここまでやってこられたのは、あなたのおかげです。あなたが買いたいものを買いなさい。お金は、どんなふうに使ってもかまいません」

その言葉に返ってきたことの答えは、大元にとって思いがけないものだった。

「それならば、学校をつくってください」

ことは現場から遠ざかっていたものの、女子教育に対する情熱を胸に秘め続けていたのである。ことの申し出を大元は快諾した。条件はたったひとつ……。自彊術を正科として取り入れることだった。自らも自彊術を実践し、その効果を実感していたことが、正科として自彊術を取り入れることになんの異存もなかったのは言うまでもない。

ことが心に秘めていた夢の実現―高等女子学校設立へ

そもそもことは、かねてから、東京女子高等師範学校同窓の戸野みちゑや斯波安らと、「私立の女学校をなんとか創設できないか」と話し合っていた。それが大元の申し出で具体的に動き始めることとなった。

すぐさま、豊島区巣鴨町5丁目に高等女子学校を設立する旨を当局に申請、1922（大正11）年2月15日には「文華高等女学校」設置が認可された。

校長は最も年長の戸野が、学監には斯波が、そして、ことは監事として会計・経営を担うこととなった。こと、51歳のときのことである。

同年4月11日の開校式では校歌が初披露された。

《身をきたへ　心きたえて　世の中に　立ちてかひある　人と生きなむ》

その歌声は今に続く十文字の伝統のはじまりだった。

ただし開校当初の文華高等女学校は、はなはだみすぼらしいものだった。巣鴨の駅から学校に行く道は雑草の生い茂った悪路だった。また、校舎は玩具工場として使われていたトタン屋根の平屋を仕切っただけで、教室はたったの3つ……。近くの牧場からは悪臭も漂ってきた。

そのため、開校した年から増築工事が進められた。ことは監事として、さらに学校施設を充実させるための計画を練りながら、クラス担任と作法の授業も受け持った。和室の教室がなかったため、ことは生徒たちを自宅に連れて行って作法の授業を行った。その結果、大元の居場所もなくなるほどだったが、大元は「俺はどこにいればいいんだろうね」と笑いながら、ことと生徒たちを温かく見守っていたという。

最大の理解者、支柱の大元が56歳で逝去

1923（大正12）年9月1日には関東大震災が発生した。そのとき、大元とことは、震災の罹災者たちに、全壊を免れた自宅や金門商会の道場を開放し、多くの人の救済にあたった。常に社会貢献を旨としていたふたりにとっては当然のことだった。

また、ことは学校運営でますます多忙になった。そんなことが夕方に帰宅すると、大元は「お母さん、お疲れ様」と温かく迎え、その日あったできごとを聞いては「お母さんはすごいですよ。よく頑張っていますね」と励ましてくれた。

その時間はことにとっては、おけがえのないものだった。

だが、それから間もなく、ことは大きな不幸に襲われた。

関東大震災という未曾有の天災から人々がようやく立ち上がろうとしていた1924（大正13）年12月19日、ことの最大の理解者であり、文華高等女学校の経済的な支柱だった大元が、その生涯を閉じたのである。

割烹（調理）実習成果
出典：『十文字こと自彊不息』

大元は12月10日に自彊術の指導から帰宅すると体の不調を口にした。翌日、熱っぽさとだるさも出てきたが、食欲もあり、誰もが「軽い風邪だろう」と思っていた。

だが16日になると、39・2度の高熱を発した。大元本人は「なに、すぐ治るさ」と笑っていたが、これはただの風邪ではない」と危惧したことは学校を休んで大元に寄り添い、看病を続けた。

18日、ことは往診に来た医者から「この2、3日は警戒を要する」と告げられた。

翌19日の朝、大元は前夜より調子がよさそうだった。

その日は文華高等女学校でバザーが開かれることになっていたが、ことは朝から静かに大元の体を揉んだり、さすったりして、寄り添っていた。

夕方になって、大元が「おこと、おこと」と、ことに呼びかけた。

「ここにいるではありませんか」

ことがそう答えると、大元はうれしそうに笑った。

しかしその後、大元の容態は急変、午後6時に静かに息を引き取った。まだ56歳、あまりにも早い別れだった。

夫を失った、ことの喪失感がいかほどのものであったかは想像するに余りあるものがある。

大元とことの深い関係性について、『十文字こと　自彊不息』（学校法人十文字学園発行）は、こう書いている。

〈大元は、ただ黙って自分の後ろをついてくるのではなく、自分と同等に話をしながら、自分と並んで歩いてくれる自立した女性を求めていた。当時の日本の男性には珍しかったに違いないが、そんな大元のお眼鏡にかなったのが、ことだったのだ。

夫婦をよく知る人は、ふたりを「ベターハーフな関係」と表現したが、確かに、大元にとってはことが、ことにとっては大元が、それぞれなくてはならない大切な存在だった〉

しかし、ことは立ち止まらなかった。1925（大正14）年2月1日、深い悲しみを乗り越えて学校の仕事を再開、理想に向かって突き進んでいくのである。

「学校をぜひ！」妻の懇請を夫が快諾

ふるさと深谷の巨人・近代日本経済の父
「渋沢栄一」の偉業に学ぶ！

レポーター●岡野綾香
（メディアコミュニケーション学科3年・埼玉県深谷市出身）

2021年のNHK大河ドラマ「青天を衝け」の主人公・渋沢栄一さんは埼玉県の出身でした。また、2024年には新1万円札の顔になることも決まっています。その渋沢栄一さんは、1840（天保11）年に武蔵国榛沢郡血洗島村（現・埼玉県深谷市血洗島）で誕生。明治、大正、昭和にかけて、第一国立銀行設立をはじめとする500あまりの企業や600以上の社会福祉・教育事業の設立・育成に関わりました。まさに近代日本の礎を築いた人物として知られていますが、その素顔とその生き方から私たちが学ぶべきこととは何かを、渋沢栄一研究の第一人者で、深谷市郷土文化会会長の新井慎一先生に教えていただきました。

【新井慎一先生プロフィール】
1950年、埼玉県深谷市生まれ。学習院大学ドイツ文学科卒業。現在、深谷市郷土文化会会長。主な著書に、『渋沢栄一を生んだ「東の家」の物語』『渋沢栄一　父と子の物語』『若き日の渋沢栄一　事上磨錬の人生』『ふるさとの渋沢栄一』ほか。

「我、いかに生きるべきか」という視点の重要性を知ろう

岡野　若き日の渋沢栄一さんの行動の原点とは、いったいどのようなところにあったのでしょうか。

新井　我々になくて渋沢さんにあったのは漢学的素養であり、儒教の教えです。

　たとえば「経世済民」という言葉がありますが、それも、国家や国を上手に治めて人民の苦しみを救うことを理想とする儒教の教えです。また、儒教は「我聖人たらん」と、聖人という理想像に向かって一所懸命に勉強していくべきだとも教えています。

　このふたつが渾然一体となって、渋沢さんは天下国家のために尽くすことと、自分自身を人格的に完成させていくことの二つを目指すようになっていったのです。

　それに対して、今の学問はどうでしょう。「我、いかに生きるべきか」という視点が欠けていませんか。

　みなさんは今、自分が学んでいることが、世界を構成する要素の中でどういう部分を占めており、どういうふうに役立っているのか考えたことがありますか？　それを自覚しなければ何を学べばいいかもわからないでしょうし、勉強しろと言われても意欲はわかないでしょう。

　もちろん、渋沢栄一が生きた時代と現代とでは時代背景も違いますから、いまさら論語を学べというわけではありません。しかし、みなさんはせっかく十文字学園女子大学で学んでいるのですから、自分の立ち位置をしっかり確かめながら、先生や学友と切磋琢磨して高め合おうとする気概を持ってほしいと思います。ぼーっと生きていてはダメ！「我、いかに生きるべきか」という視点が大切なのです。

渋沢栄一アンドロイドの前で、取材に同行していただいた川瀬基寛先生（十文字学園女子大学 社会情報デザイン学部教授）と記念撮影。

求められるのは、日々「自分を振り返る」という作業

岡野　私たちは変化と不安が伴うアフターコロナの時代に生きることになりますが、渋沢栄一さんに学ぶべきことはどのようなことでしょうか。

新井　論語の中に、「我日に三度我が身を省みる」という言葉があります。自分は毎日たびたび自分自身を振り返って、反省しているという意味です。

　渋沢さんはその教えを実践していました。毎晩寝る前に、朝から起きたことをひとつひとつ思い出して、「あの人に会ったときに自分はきちんと真心を持って応対できただろうか。なにか相手に失礼なことを言わなかっただろうか」と反省してから寝ていたそうです。

　そういう作業は、コロナの時代であろうがなかろうが、社会人であろうが学生であろうが、すべての人に必要なことではないでしょうか。その振り返りが自分を向上させていくことになるはずですよ。

自立した女性が力を発揮する時代を目指そう！

岡野　現代に渋沢栄一が生きているとしたら、どう行動したでしょうか。

新井　コロナ禍の真っただ中にあって、「日本はこのままで大丈夫なのか？」と思った人が多かったのではないでしょうか？

　ワクチンは他国の製品に頼らざるを得ませんでしたし、できず自宅待機を余儀なくされたまま亡くなった人もいました。

　そうした現実を前に、国民の命や財産を守るためには、日本はもっときちんとした体制を整えておかなければならないと考えた人も多かったと思います。

　これは安全保障の問題に通じる話です。

　たとえば日本の食料自給率はカロリーベースで37％（2020年度）に過ぎません。今は他国から買えるからいいでしょう。しかし、仮に世界的な食糧危機がやってきたとき、それで対応できるのでしょうか。あるいは、万が一、他国が武力に訴えてきたとき、日本はどうするのでしょうか。いざとなったときにアメリカが日本国民の生命と財産を守ってくれるのでしょうか。

　渋沢さん自身、戦争は大嫌いで軍事産業には一切加担しませんでしたが、安全保障に関わる分野についてはできるだけ国産化を目指すとともに、経済全体のバランスを考えながら慎重に行動していく道を模索したのではないでしょうか。

　また、渋沢さんは民主主義を基本とし、男女の別なく若者の能力を高めるべきだとして、女子の高等教育にも力を注いでいました。

　たとえば、1896（明治29）年、成瀬仁蔵先生が日本女子大学校の創立に着手したとき、渋沢さんは設立発起人に加わり、1901（明治34）年の創立後も運営資金として多額な寄付をしたり、寄宿舎を寄付したりしています。そんな渋沢さんがいちばん力を入れたのは実業教育であり、りっぱな経済人を育てようとしていました。仮に渋沢さんが今も生きていたら、「女性よ、もっともっと社会に飛び出せ！」と檄を飛ばしていたかもしれません。

アフターコロナ時代に求められる協働の大切さ

岡野　十文字学園女子大学には、創立者の十文字こと先生が遺した、「実学を大切にせよ」「体験を通して学べ」といった教えがあります。それと相通ずるところがありますね。

新井　そうですね。また、渋沢さんは、「協働」の大切さも謳っています。企業は自社の利益だけを追求してはいけない。大きな目的のために、それぞれが対等の立場で協力して共に働くことが大切だということです。

　世界的に貧富の差が急速に拡大している今、渋沢さんが目指した協働を実現するための国づくりが大切になっているのではないでしょうか。十文字学園女子大学のみなさんには、その先頭に立ってほしいと思います。

【取材後記】渋沢翁が認めた　こと先生の〝志〟

　取材後、私は十文字学園が渋沢栄一翁とご縁があったことを知りました。十文字学園の前身である文華高等女学校が1922（大正11）年に創設された直後、こと先生たちは学校施設充実のため各有力者の方々に学校支援を働きかけます。その中のひとりが渋沢翁だったというのです。

　こと先生直筆の『記録　壱号』の同年6月23日の項に、「24日朝8時前に渋沢邸に来るように」という返事があり、文華高等女学校の交友会誌『文筆』には寄贈者として「子爵　渋沢栄一殿」と記録されています。渋沢翁は、こと先生の志に心から賛同して寄付されていたのです。

渋沢栄一肖像写真。出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」

ぜひ足を運んでほしい……渋沢栄一記念館

渋沢栄一記念館の外観
画像提供：深谷市

　渋沢栄一記念館の資料室には、渋沢栄一ゆかりの遺墨や写真などをはじめ、たくさんの資料が展示されています。また、講義室では「渋沢栄一アンドロイド」（右ページ写真）による講義を見学することができます。

　2020年に完成して以来、大正時代に渋沢栄一が語った『道徳経済合一説』を、アンドロイドが発する言葉として伝えています。

　講義は原文を多少現代風にアレンジしている部分があるといいますが、その声は渋沢栄一氏本人の肉声をもとにしており、本当にリアルですし、風貌も本人そっくり！　うなずいたり、瞬きしているのを見ていると、つい渋沢さん本人が目の前にいるような気になってしまいます。深谷市出身の私としては、ぜひ皆さんに足を運んでいただきたいスポットです。

【アクセス情報】埼玉県深谷市下手計1204▶☎048-587-1100▶開館時間：９～17時▶休館日：年末年始（12月29日～１月３日）▶入館料：無料▶最寄駅：JR高崎線深谷駅または岡部駅

女性よ、もっともっと社会に飛び出せ！

yogibo WE LEAGUE 発足！ 活躍する 十文字OG選手

大宮アルディージャVENTUS FW 17

鳥海由佳（Yuka TORIUMI）

1996年7月26日生／東京都／148cm・43kg

大学ではクラスの仲間と協力しながら調理実習を行い、栄養学を学びました。それを自分だけでなく周りの人にも生かしていきたいです。4年間の経験が無駄になることはないと思うので、何があっても諦めず、大学生活を楽しんでほしいです。

©1998 N.O.ARDIJA

大宮アルディージャVENTUS DF 26

杉澤海星（Mihoshi SUGISAWA）

2002年8月17日生／神奈川県／159cm・52kg

入学後のサッカー部の応援歌練習はすごく大変でしたが、同学年での絆が深まったと思います。WEリーガーになって今までの環境とは違い、レベルが高く、刺激的な毎日を過ごすことができています。後輩にはサッカーはもちろん、それ以外の面でも良い影響を与えられたら嬉しく思います。

©1998 N.O.ARDIJA

大宮アルディージャVENTUS MF 25

村上真帆（Maho MURAKAMI）

1998年6月15日生／埼玉県／163cm・55kg

高校時代にはベンチに入れないサポートメンバーも含めて部員全員でつかみ取った全国優勝が思い出に残っています。WEリーガーとしては個人の成長はもちろんですが、チームの勝利に貢献し、WEリーグを多くの人に認知してもらいたいです。学生のうちにやりたいことをたくさんやって今を楽しんだもん勝ちだと思います！

©1998 N.O.ARDIJA

大宮アルディージャVENTUS MF 24

源間葉月（Hazuki GENMA）

1998年10月28日生／埼玉県／165cm・60kg

朝練をしてから授業に行くのは大変でしたが、充実した学生生活でした。いまはレベルの高い環境で経験のある選手と一緒にサッカーをさせてもらっているので、たくさんのことを吸収して成長していきたいです。お互い成長できるように頑張りましょう！

©1998 N.O.ARDIJA

十文字学園女子大学副学長
JFA女子委員長

佐々木則夫（ささきのりお）

私自身、なでしこジャパンが2011年ワールドカップ優勝後のクションの物足りなさを感じてる中、現・日本サッカー協会の嶋幸三（しまこうぞう）会長と未来の女子サッカについて相談し、女子のプロリグ化、そしてサッカーのみなら女性が活躍する現代にも特化し、社会の模範になるようなリーを創設しました。それが「WEーグ（Women Empowerment Lea-e）」です。

私はスタートするまで準備室長して関わり、初代・岡島喜久子ェアにバトンを渡し、2021年9月12日にリーグ戦が開幕されした。コロナが収束しない状況厳しいタイミングのスタートとなりましたが、こんな時だからそ女性のパワーと、新たなチャンジをスタートさせる思いを社に見せるために、11クラブが結し、スタートを切ることができした。

2021年東京五輪で、なでしジャパンはメダルに届きませんたが、再び世界の頂点を目指には、WEリーグの誕生と成長大きなポイントになります。

私たちが目指しているのは、競力のみならず、選手はもちろん、ーグに関わるすべての方々の人的形成の成長に深く寄与していことです。それに基づいてWEーグのクレド（行動規範）を11ラブ全選手が知恵を絞り作ってれました。

私たちは、自由に夢や憧れを抱ける未来を創る。
共にワクワクする未来を創る。
互いを尊重し、愛でつながる未来を創る。

WEリーグで熱戦を展開するラバル同士ですが、この3つのスートメントを通じて、リーグ全で連帯感を持つことが、彼女たが価値のある存在として、社会中で影響を与えていくことにつがるのです。

十文字高等学校OGのWEリーガー手たちには、学園で培った、「立てかひある人」の形成を学んだ神のもと、常に観られる立場でると同時に、サポーター、地域の発信力と貢献活動等、プロクブの運営にも積極的に取り組みつ、様々な学びを通じて人とし成長し、なでしこジャパンとし世界を目指してほしい。

また今後も多くの学園OGがWリーガーを目指すことを期待しいます。

日テレ・東京ヴェルディベレーザ DF 4

土光真代（Mayo DOKO）

1996年5月3日生／埼玉県／164cm・55kg

小さい頃の夢は〝サッカー選手〟でした。大好きなサッカーを仕事にできることはとても幸せです。たくさんの女の子たちが憧れる人を目標に、WEリーグでプレーしたいと思ってもらえるよう、観ていてもやっていても楽しいサッカーを目指して成長し続けます。ベレーザの応援宜しくお願いします！

©TOKYO VERDY

AC長野パルセイロ・レディース MF 8

住永楽夢（Ramu SUMINAGA）

1998年3月5日生／熊本県／145cm・45kg

十文字高等学校での3年間で私は強靭な精神力を得ました。ここで学んだ粘り強さと諦めの悪さは私のプレーの持ち味です。観ている方が熱くなるような、そして1人でも多くの方の心を動かすようなプレーを目指します！

（C）2008 PARCEIRO

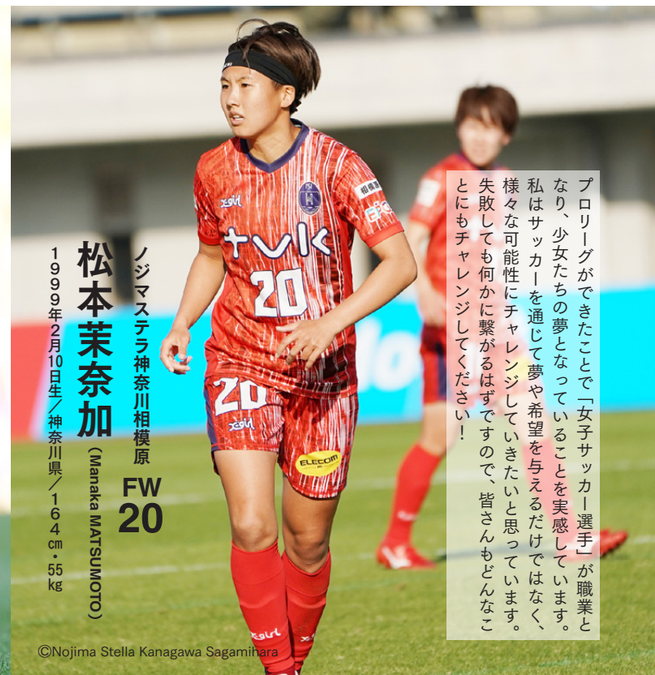
AC長野パルセイロ・レディース MF 10

瀧澤千聖（Chise TAKIZAWA）

2001年2月14日生／長野県／152cm・44kg

今年背番号10を頂きました。得点やアシストなど目に見える結果を残し、チームに絶対必要と思われる選手になりたいと思います。好きなことや夢中になっていることをやり続けることが大切。最後まで諦めずに自分を信じて、楽しんでください。

（C）2008 PARCEIRO



ノジマステラ神奈川相模原 FW 20

松本茉奈加（Manaka MATSUMOTO）

1999年2月10日生／神奈川県／164cm・55kg

プロリーグができたことで「女子サッカー選手」が職業となり、少女たちの夢となっていることを実感しています。私はサッカーを通じて夢や希望を与えるだけではなく、様々な可能性にチャレンジしていきたいと思っています。失敗しても何かに繋がるはずですので、皆さんもどんなことにもチャレンジしてください！

©Nojima Stella Kanagawa Sagamihara

JUMONJI TOPICS

志木市主催「減らソルトレシピコンテスト」で 食物栄養学科学生2名が受賞

志木市主催で行われた「減らソルトレシピコンテスト」に十文字学園女子大学食物栄養学科の学生２名が応募。「おいしく減塩」をテーマとしたオリジナルレシピ「トマトがじゅわっとチキンボール」が審査員特別賞を、「鶏もも肉のネギ塩レモンがけ」が女子栄養大学賞を受賞し、2021年11月13日に行われた表彰式で香川武文志木市長から表彰状を授与された。また、同コンテストにおける十文字学園女子大学賞は、越谷市在住の20代女性に贈られた。

【審査員特別賞受賞】香川武文市長（左）、食物栄養学科3年 山口美優さん（中）、志木市子ども・健康部 大熊克之部長（右）　写真提供：志木市

【女子栄養大学賞受賞】香川武文市長（左）、食物栄養学科2年 節原沙羅さん（中）、女子栄養大学栄養クリニック 蒲池桂子教授（右）　写真提供：志木市

日本マンドリン独奏コンクールで 卒業生が優勝

2021年11月28日に開催された「第27回日本マンドリン独奏コンクール」（一般社団法人日本マンドリン連盟主催）において、十文字高等学校の卒業生である髙橋鈴奈さん（社会人１年）と土橋瞳子さん（大学３年生）が本選ファイナリスト６名に残り、髙橋さんがみごと優勝した。在学時代からマンドリン部の練習と学業の両立に励み、卒業してからも活躍している姿は、在校生たちの大きな励みとなった。

優勝の盾をいただいた髙橋さん

東京薬科大学と高大接続教育に 向け高大連携協定を締結

十文字中学高等学校と東京薬科大学は、高大接続教育の観点から、連携強化を図ることを目的に、2021年12月17日に東京薬科大学にて高大連携協定を締結した。

本協定は、十文字中学高等学校が掲げる「Your Futurity」、「希望の進路を実現するため充実したキャリア教育」および「物事に主体的に取り組み、社会で活躍できる女性の育成」といった理念とそれに基づく事業計画について、東京薬科大学が薬学・生命科学という学問分野で積極的に支援することで合意。特に医療、環境、工学に携わる優秀な人材の育成と若者たちの将来の夢実現に向けて、より強固な協力体制を構築していくことを目的とし締結された。

東京薬科大学の平塚明学長（左）と十文字中学高等学校の横尾康治校長

短大55周年の歴史を糧に100周年へ 〈若桐会総会〉十文字理事長夫妻が感謝の言葉

2021年６月６日、若桐会総会がオンラインで行われた。2021年は十文字学園女子大学の前身の短大創立55周年にあたり、十文字一夫理事長が十文字良子前理事長と共に新座キャンパスを立ち上げた思い出を語り、参加者全員で十文字学園100周年の盛会を期した。

十文字理事長は、「短大創立の目前、学生寮の建築が追いつかず、学生に巣鴨の自宅を開放し、第一期生とともに、しばらくの間過ごしました」と振り返り、「皆さまと元気にお目にかかれる日を楽しみにしております」と締めくくった。十文字佑子副理事長は、総会が開催できたことへの感謝と、学生や大学への一層の支援と協力を会員にお願いした。

若桐会総会であいさつする十文字理事長夫妻

武蔵野会が個人キャレルを寄贈 大学の図書館設備を充実

十文字学園創立100周年を記念して、2021年12月に武蔵野会（保護者会）から「個人キャレル」（キャレル：carrelとは、図書館の個人閲覧室・自習用机のこと）12台が寄贈され、大学図書館３階の窓際にカーブを描く白色の外観がかわいらしいブースが設置された。そのデスク内部には、コンセントや照明が組み込まれ集中度は抜群。ホワイトの囲みの中へ柔らかな光が注ぐ環境に、「落ち着いて勉強ができる」「集中して資格取得や語学などの勉強に取り組める」と、学生の評判も上々である。

個人キャレルを使用して自習に励む学生

オミクロン株にも万全の備えを！

新型コロナウイルスの流行はいったん収まるかに思われましたが、変異株「オミクロン株」の出現により再び感染が急拡大して第６波を迎えています。こうした事態に対し、十文字中学高等学校、十文字学園女子大学、十文字女子大附属幼稚園は、状況の変化に対応して、生徒、学生、園児たちの学びの場を守るために、最新の情報をもとに感染防止対策を実施しています。新型コロナウイルス対策に関する情報は、随時インターネットで発信していきますので、必ず確認していただきたいと思います。

園庭のうた

2021・夏の行事・イベント

プール遊び

７月15日、幼稚園のプール遊びにお邪魔しました。曇りがちでやや肌寒さを感じる天気でしたが、園児たちは水の中でもみな元気いっぱい。お友だちや先生と楽しそうに笑いあいながら、プールを楽しんでいました。

夏のお楽しみをみんなで

十文字女子大附属幼稚園　主事　竹迫（たかば）久美子

２０２１年の夏は雨の多い蒸し暑い夏でしたね。暑い夏も子どもたちは大好き！　暑さに負けず、汗をかきかき遊び回っています。そんな夏ならではのお楽しみのひとつは水遊びやプール遊び。夏の期間だけ玄関前に大きなプール２つと小さなプールも６つ出して、思い切り水に親しみます。みんなで水を掛け合ったり、ワニさんおよぎ、フープくぐり、ビー玉探しなど楽しみながら、気持ちよく、開放的に過ごしている子どもたちです。

また昔ながらの夏の風物詩でもある「スイカ割り」もみんなで楽しみます。はりきってスイカを狙って棒を振り下ろしたり、お友達を応援したり……、そして最後のお楽しみはみんなでスイカを食べること。外で食べるスイカは格別な味です。夏の行事を通して子どもは楽しみながら季節感を味わっています。

今年もコロナに振り回されました。このような行事を行う時も感染対策に気をつけながらおこないました。

幼稚園ではあまり神経質になりすぎず、でもできることはしっかりと対策をし、子どもたちの楽しい園生活を守っていきたいと思っています。

タートルだより

子どもたちは毎日の幼稚園生活の中で保育者とともに色々なことを考え、またお友達と関わりながら楽しい遊びを繰り広げています。そんな様子を幼稚園でずっーと飼っている「カメコ」からのお便りという形でお伝えしています。ぜひご覧ください。

https://youchien.jumonji-u.ac.jp/turtle/

スイカ割り

７月19日、幼稚園前で行われたスイカ割りの様子です。梅雨明け直後の猛暑を避け、日除を使いながらスイカを割りました。年長組は目隠しをして、年中組は目隠しなしで挑戦するも、なかなか割れないスイカを相手に苦戦していました。

学園100周年プロジェクト

十文字学園創立100周年！

✳ 建学理念コンクールを実施しています

建学理念や十文字こと先生の生涯について、あなたの思いや感じたことを、作文・詩・こと先生への手紙・イラストで、“自分らしく”自由に表現してみませんか。皆様のご応募お待ちしております。

【応募期間】2021年12月１日(水)～2022年３月31日(木)

◉詳細は同封のリーフレット、または下記ウェブサイトをご覧ください。

https://www.jumonji-u.ac.jp/contribution/laboratory/woman/kengaku100th/

✳ 十文字学園創立100周年記念募金

十文字学園に向けたご高配とご支援を賜りたくお願い申し上げます。詳しい内容は、本誌同封の「趣意書」をご覧ください。100周年サイトでもご覧いただけます。

ご不明な点は事務局までお問い合わせください。

✳ 十文字学園創立100周年記念講演

- 講演テーマ：多様な個が輝く新時代へ
- 講演者：植木 朝子氏（同志社大学 学長）
- 日時：2022年５月21日（土）14時00分～
- 開催方法：対面およびオンライン併用
- 参加費：無料
- 会場：十文字学園女子大学 記念ホール
- 会場定員：500名程度（定員に達し次第、オンライン参加のみの受付となります）
- 申込みについて：２月末頃、十文字学園100周年サイト上に掲載予定

〈十文字学園100周年サイト〉

https://gakuen.jumonji-u.ac.jp/100th/archive/1718/

- 問い合わせ先：十文字学園100周年プロジェクト事務局

TEL：048-423-3749（直通）

E-mail：100th@jumonji-u.ac.jp

植木 朝子氏プロフィール：1995年お茶の水女子大学大学院博士課程単位取得退学後、1996年十文字学園女子短期大学専任講師、2001年同短期大学助教授、2003年同大学助教授を経て、2005年同志社大学文学部助教授、2007年同大学教授。2020年同志社大学第34代学長に就任。専門は中世歌謡・芸能。博士（人文科学）。

※新型コロナウイルス感染拡大状況により、開催時間および会場等を調整する可能性があります。場合によっては、オンライン開催のみになることもあります。詳細は２月末以降、十文字学園100周年サイトをご確認ください。

立ちてかひある Vol.4

令和4年2月15日発行

発行 十文字学園

〒170-0004 東京都豊島区北大塚1-10-33
電話：03-3918-0511（代表）
〒352-8510 埼玉県新座市菅沢2-1-28
電話：048-477-0555（代表）

発行人 岡本英之（十文字学園副本部長）
編集人 本間 修（十文字学園法人本部総務室室長）
副編集人 池間里代子（十文字学園女子大学教授、十文字中学高等学校中国語講師）
原 一彰（十文字学園法人本部総務室課長〈広報担当〉）
本望 千尋（十文字学園法人本部総務室職員〈広報担当〉）
監修 大西 正行（十文字学園広報担当フェロー）
編集制作協力 ザ・ライトスタッフオフィス
印刷所 大観社

〈編集後記〉

2019年末、中国でコロナウイルス感染情報が伝えられて以来2年余の春夏秋冬…取材班は、今、変異株オミクロン対策にも留意しつつ、その一日も早い終息を願って、学生・生徒、教職員、OG、地域の方々に御協力いただき、今夏に式典を迎える学園創立100周年直前号を皆様にお届けすることができました。

私たちの感動は、アクリル板越しに接した各位の肉声の中にあります。「コロナ禍に阻まれてチーム作りが遅れ、試合に臨まざるを得なかった。でも、だからこそ、選手たちは自分が何をやるべきかを悩み、戦いの現場で実践し成長したのです」（十文字中学高等学校サッカー部顧問・武井由貴子先生）。

コロナ禍の逆境を励ます応援歌は、度重なる辛苦を克服し学園の再起を果たす「十文字こと物語」にも、埼玉の巨星「渋沢栄一」の研究者新井慎一先生の教え「日々自分を振り返り、我、いかに生きるべきかの視点を持て！」にも出てきます。格差や分断などという言葉が覆う世間に眉をあげ、自らが目標を持って十文字で学び続ける後進の大事な一歩にも、今号がお役に立てば本望です。

（「立ちてかひある」発行編集担当者一同）

※「立ちてかひある」へのご感想・ご要望は十文字学園女子大学広報課 kohosi-g@jumonji-u.ac.jpまでお寄せください。